

西村常次郎殉難の記

小笠原 知 新

時は大正11年8月24日午前のことであった。西村常次郎(50才)は王子の馬鉄の橋の上に上っていた。その時は開村以来の大雨の為に佐幌川にかかっている上流の橋梁は既に流れ去っていた。後に残る唯一の連絡橋は、この橋だけとなっていた。今将にこの橋も降り続く雨と増水の犠牲になろうとしていたのであった。

早朝より出動していた新得消防組ほか佐幌新得の有志20名前後の者はなす術を知らなかった。西村常次郎は、この軌道を職場として馬数頭を持ち、馬追いをし若者数人を使っている親方であった。

この橋が流されれば明日より同僚と共にその業に従事することは出来ないと言う必死の念が強く働きかけたかも知れない。誰かが止めようとしたが長柄のトビを持っていきおいよく走り橋の中央附近で上流より根こそぎ流れて引かかっている枝付きの樹を右手前の方へ引き寄せれば自然の流れとなって橋の負担を助けることが出来ると、自信を持っての行動であった。満身の力を込めて長柄のトビを打込み手許へ引こうとしたが、そのときその引く力よりも更に流れて来た流木のシャクリが強かったため、トビ諸共水中に飛び込まざるを得なかった。

そのとき殆んど同時にその橋梁は向う岸の方から流れていった。水中に没した彼は一度浮び上り片手を上げて大声を上げたが再び浮んではこなかった。遂に行方不明となり更に増員して数日行方を捜したが見当てることが出来なかった。

そして或時期まで死亡届けも出来ず家族の悲しみは筆舌に書すことは出来なかった。往時を顧みて殉難の記録を今ここに記すこととする。

当時の同家の家族構成は、

妻	みつ	43才	四女	ウタ	12才
長男	安太郎	23才	五女	まつゑ	10才
三女	キヨ	18才	三男	光雄	8才
二男	利治	16才	六女	みさを	5才

であり、

残された8人は、一家の大黒柱を失い路頭に迷ったのであった。当時は何の補償とてなく対策も何もない時代であった。妻みつは小学校を出た子供三人と共に労働と奉公に従事するほかはなかった。然し子供の成長を楽しみに母みつは、なり振りかまわず働き続けた。それぞれ成人し一家を構えさせ、昭和39年87才で他界している。

何故私はこのことを取上げ記すことになったか、郷土新得を知ろうとするとき過去に災難に遇うたがために命を亡くした人は何人かいる、開拓当時は熊におそわれた人、伐採の